



続:午睡とピクニック～ 終章～



ふありの書斎

2024年6月12日 20:00

3月。外はまだ寒い。

ぼくが、こゆりをマンションに連れてきた日は、雲が低く垂れこめ、細い雨が降り注いでいた。

「はい。今日からここが君の家だよ」

玄関の、鍵を開けてこゆりを中へ案内したとき、情けなくもぼくは、もの凄く緊張していた。今まで、女の子を家に招いたことなんて無かったから、とにかく、ここが安全な場所だと思ってもらいたかった。

「お腹減ったでしょう？ なにか作ろうか？」

ぼくの問いに、こゆりは、小さく頭を振り、なにも要らないと表現する。

「じゃあ、せめてお茶くらいなら淹れるよ。冷えた身体に丁度良いからね。ぼくも飲もうかな」

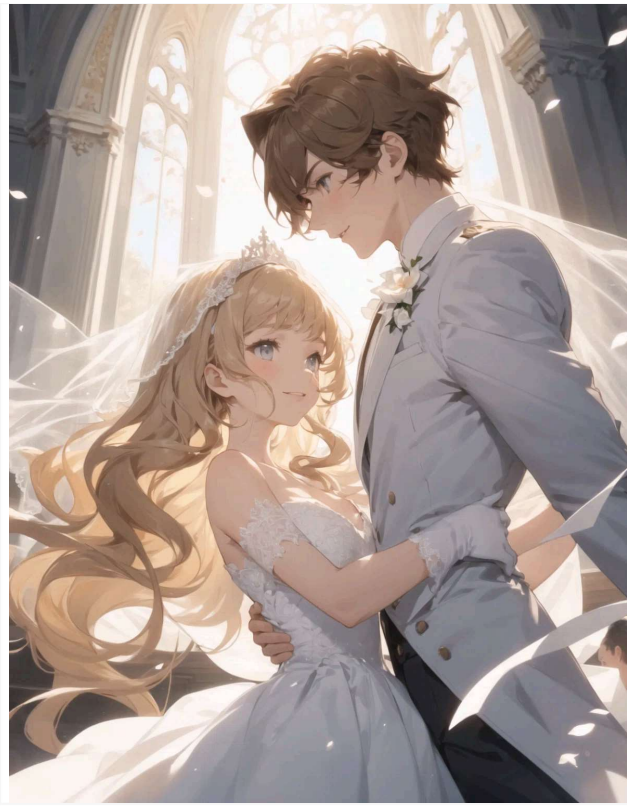
こゆりはただ黙って、頷く。ぼくはキッチンに入り、戸棚から、ティーセットや紅茶の缶を取り出し、ひと通りの用意を済ませた。紅茶の缶は姉の翠が愛飲している、ウバ茶で、少し拝借しても良いだろう。ミルクとお砂糖たっぷりに淹れてあげれば、ここまでの疲れも癒せるだろうか。ぼくは、時間を掛けて丁寧に茶を淹れると、こゆりの座るソファの前のローテーブルに、コトッと青バラのマグカップを置く。このマグは姉さんの趣味だ。



ウエディングverこゆりと碧



沢山の人の祝福されて



ちょっと緊張気味なふたり

「ごめんね。このマグ姉さんのなんだ。女性用のものが他に無くて、この先、君の使う物は徐々に揃えていくから。今は、これで我慢して」

こゆりは頭を振り、

^{よしづき}

「葦月さん...」

と、初めて口をあけた。

^{あおい}

「碧で、良いよ」

「あ...あお...あ、あお...ちゃん」

ぼくは、初めて呼ばれるその言葉が、とても新鮮で、クスツと笑い、なに？と、首を傾げる。^{かし}

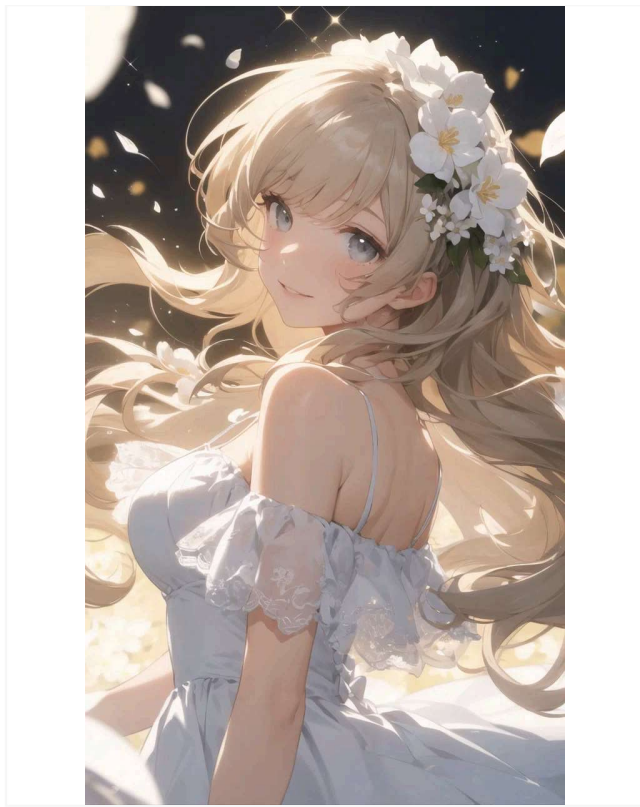
『あおちゃん、起きて』

おかしいこと言うなあ。ぼくは起きているのに...

「.....夢？」

ハツとして、ぼくは目が覚めた。すると、一番に目に飛び込んできたのは、こゆりの涙で、ぐしゃぐしゃになった顔と、瞳にいっぱい涙をためて、雫がぼくの頬にこぼれ落ちているのを。

「...こゆり？なんで泣いているの？」



あおちゃん、大好き

「...覚えてないの？」

「...うん」

こゆりが、再び瞳に大きな涙を浮かべる。

「公園に突然強風が吹いて、ウエディングアーチが倒れたの。それが、丁度わたしの方に向かってきて、あおちゃんが、わたしを庇って、ウエディングアーチの下敷きになって倒れたの。わたしは何処も怪我しなかったけど、あおちゃんが頭を強打して...今の今まで、気づかなかった。あおちゃん、頭、痛くない？」



こゆり、生涯守るからね



わたしも、ずっと一緒

「いや...特別何も無いけど」

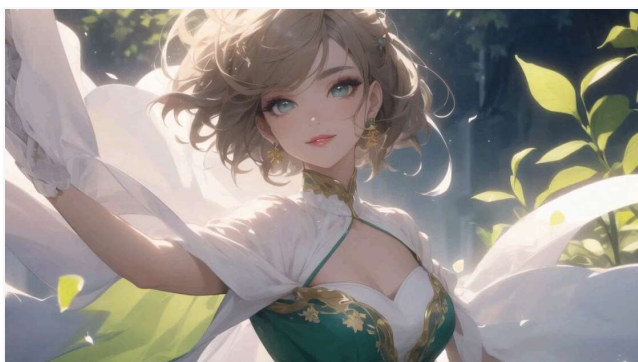
「本当？本当に本当？」

こゆりが、ホッと安堵の表情に変わっていった。

「...みんなは？」

式に参列した皆には迷惑を掛けてしまった。

「あら～、可愛い弟が倒れて、簡単に見捨てる女だと思っ^{あね}た？」



碧は私の大切な弟よ



俺だって負けるもんか！

「姉さん。居てくれたんだ」

ぼくは上背をあげて、姉さんのどこか不安気な顔を見すえる。

「おーい。俺を忘れんな。お前のデカイ身体担いだのは俺なんだぜ。少しは感謝しろっ」

かい

甲斐が、ソファに伸びている。

「だいたい、碧が悪いんだぜ。そのデカイ身体、どんだけ牛乳飲めばそこまで伸びんだよ」

甲斐は、ぶつくさ文句を言い、今からでも間に合うなら俺、牛乳1リットル飲む覚悟あるんよ...などと言っている。

「まあ、式はお流れになったけど、弟の晴れ姿と、こゆりちゃんの、可愛らしいドレス姿が拝めたから、式はまたいずれね。碧、今度はちゃんと屋内のチャペルですよ。国内でも、国外でもね」

「...考えとく」

「はあ？なにが、考えとく、なのよ」

すると、こゆりが、

「わたし...わたしがいけないの！ごく親しい人だけの、みんなで、公園でピクニックするような感覚が...あおちゃんに無理を言ったから、だから...わたしがいけなかったの」

「こゆり！違う、違う、こゆりが悪いんじゃない。きちんと天気を把握していなかった...落ち度があるとすれば、それはみんな、ぼくの責任だ」「でも...わがまま言ったの...わたしのに？」

こゆりが、再び涙を浮かべるので、ぼくは途方にくれた。

「はーっ。はいはい、ごちそうさま。なんだか雨脚が強くなってきたから、私、そろそろ帰らせて頂こうかしら。甲斐くん、私を家まで送りなさい」

「はあ！？な...何で俺が」

甲斐が、ぶつぶつ呟くが、所詮この世に、女王気質の姉に適う人間なんていやしない。勿論、ぼくも、甲斐も。

「あなたの愛車が心地いいのよ。それとも何？雨の中をじっとりと何人も乗せたタクシーで帰ろって？」

「...いつも寝ているだけじゃないですか」

姉さんは甲斐の襟首を掴んで、ズルズル引っ張っていく。

「じゃあね、碧、こゆりちゃん。また、遊びに来るわ」

ガヤガヤ煩い去り音を響かせて、ふたりの気配が完全に消えると、こゆりが、ベッドに入ってきて、ぎゅーっとなでかして抱きついてくる。

「あおちゃん、ここで眠らせてね、わたしを、一人にしないでね」

「...そのつもりだけど」

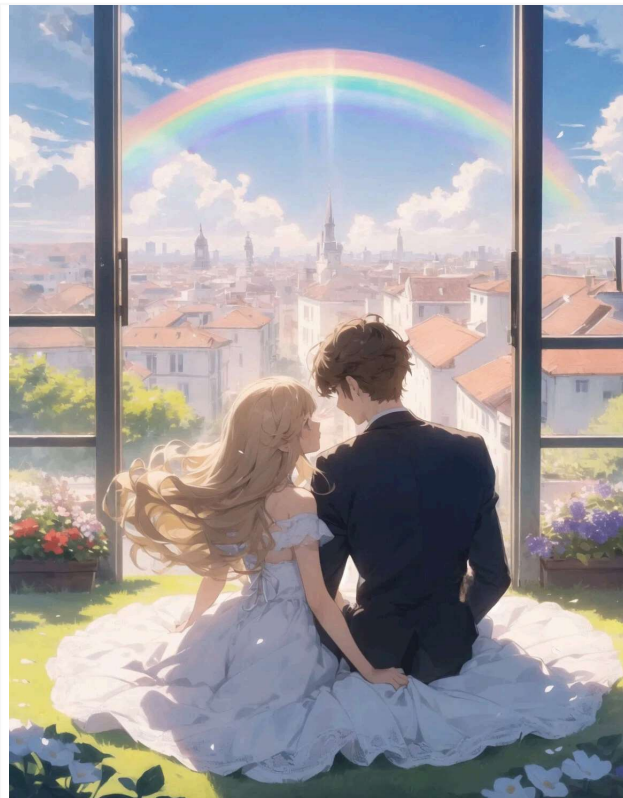
「大好き、あおちゃん」



あ...今...コクって動いたよ

そのまま、ぼくらは眠りにつき、朝を迎えた。一足先に目覚めたぼくは、ベッドから降りて、窓のブラインドを開けた。その音で、こゆりも目を覚ますと、ぼくの隣に歩み寄り、ぼくは人差し指で窓の向こうを指さした。

「わあああ！虹が出てる！」



ふたりを祝福する虹のアーチ

そう、マンションの窓からは、昨晚の雨の贈り物、淡く儚げな虹が、ぼくらを祝福するかのよう
に、アーチを描いていた。

完

文 ふありの書斎

イラスト 月猫ゆめや様

この作品はnoteのクリエイター、ふありの書斎と、月猫ゆめや様によるコラボ作品です。もう月日
が経ってしまいましたが、『午睡とピクニック』という、タイトルで2作発表させて頂きました。
この物語は、その後日談にあたります。
原作、発案、文をふありが担当し、そこに美しいイラストを月猫様が添えて下さいました。



絵師・月猫様作画

毎日、月猫様と作品について話し合い、ふあり原作を元に、出来るだけ忠実に沿って書かせて頂きました。

お互い、それぞれ重い疾患を抱えながらも、共感し、趣向が似ているところなど、沢山の発見がありました。ふたりそれぞれの良い部分を分かち合い、影響を受け、1人間として尊敬の念を抱き、成長することが出来たこと、それが、わたしにとって何よりの成果であり、収穫であると思っています。

さて、ここで私事ですが、もともと精神疾患を抱えるわたしの、うつ病が悪化し、午前中は、ほぼ寝たきり状態になっています。午後を迎え、少しずつ浮上はするものの、全く回復の目処がたたず、今作を持ちまして、再び休養させて頂こうと思いました。

今まで、noteのクリエイター様、読者様、支えてくれた家族、そして、これからも末永くと誓った月猫様、沢山弱音を吐くわたしを受け止めて下さり、有難うございました。

また、皆さまにお会い出来るまで、その日を夢見て、治療に専念したいと思います。
心から、有難うございました。

ふありの書齋

※『続:午睡とピクニック』シリーズは、マガジンを作成しています。途中参加の方は、そちらからでも拝読出来ますので、シリーズ全7話をご一読願えれば幸いです。